

令和2年度「飼料用米多収日本一」受賞者の取組概要

褒賞名	茨城県農業再生協議会長賞
受賞者名	片岡 秀男氏
所在地	利根町
品種名及び作付面積	オオナリ 8.6ha
10a当たり収量	714kg
地域の平均単収からの増収	184kg
移植日	5月4日
施肥 (基肥+追肥)	4月25日 軽量一発077(N-P-K=30-7-7)を45kg/10a施用 (N13.5kg, P3.15kg, K3.15kg)
収穫日	9月20日
取組内容	<p>○経営形態・経営面積・作付品種及び各面積 ・家族経営(本人, 妻, 息子の3名と期間雇用延べ10名)により, 水稲15.5haの水稲単作経営。地域の担い手として, 水田作業の受託も行う。 ・水稲の内訳は, 主食用米(コシヒカリ)を7ha, 飼料用米(オオナリ)を8ha栽培している。</p> <p>○多収品種への取組状況(取り組んでいる期間や経緯等)・作付品種及び面積・品種選択の理由等 ・H25年頃から飼料用米の生産を開始し, これまで「ホシアオバ」や「夢あおば」などを栽培。 ・「飼料用米多収日本一」では, 平成28年度には「夢あおば」で, 令和元年度には「オオナリ」で表彰を受けている。</p> <p>○多収を達成するために取り組んだことについて (播種形式・施肥方法・水管理等、生産性向上に向けた取組) ・オオナリは出芽揃いが悪いなどやや育苗しづらいが, 育苗期間をやや長めにし(25日程度), 健苗育成に努めている。 ・収量を確保するため, 移植時期は5月初旬(5/4~8)に行っている。播種量は200g/箱程度。栽植密度は45株/坪, 植付本数はやや少なめ(疎植になりすぎないように気を付けている)。育苗箱の使用枚数は14枚/10a程度。 ・水管理は生育期間中には雑草を抑制するために深水とし, 中干しは軽めにしている。間断灌漑期間にもなるべく水を切らないようにし, 風や高温等の気象災害に強い稲づくりに努めている。 ・地域の大規模普通作経営体から品種や技術に関する助言を受けながら, 除草管理や水管理を徹底するなど, 基本技術を丁寧に行っている。</p>

令和2年度「飼料用米多収日本一」受賞者の取組概要

褒賞名	鹿島地域飼料米生産利用推進協議会長賞
受賞者名	木村 孝正
所在地	銚田市
品種名及び作付面積	あきだわら 2.9ha
10a当たり収量	691kg
地域の平均単収からの増収	170.2kg
移植日	5/15～20
施肥(基肥)	5/1～3 オール14 40kg/10a
施肥(追肥)	無し
収穫日	10/5～8
取組内容	<p>○経営形態・経営面積・作付品種及び各面積 ・家族経営(本人、妻、期間雇用2名)により、水稲6.7 ha、ホウレンソウ30 aの複合経営。地域の担い手として、水田作業の受託を行う等、経営規模の拡大に取り組んでいる。</p> <p>○多収品種への取組状況(取り組んでいる期間や経緯等)・作付品種及び面積・品種選択の理由等 ・H27年からJAのアドバイスにより、多収で耐倒伏性に優れる知事特認品種「あきだわら」を導入し、経営面積のおよそ4割で飼料用米を生産している。</p> <p>○多収を達成するために取り組んだことについて (播種形式・施肥方法・水管理等、生産性向上に向けた取組) ・苗質の向上のため165g/箱となるよう播種、太く健康な苗づくりに努め、初期生育の確保につなげている。 ・収量を確保するため、例年7月上旬から約2週間の中干しや間断灌漑を実施し、田面を硬くして稲の倒伏を防ぐとともに、根張りをよくして良好な登熟に努め、未熟粒の発生を抑えている。 ・多肥栽培での紋枯病発病による倒伏を防ぐため、適期に薬剤防除を行うなど、病虫害防除にも取り組んでいる。</p> <p>○生産コスト削減等の取組効果について ・疎植栽培に取り組み、使用育苗箱は慣行18枚/10aに対し、13枚/10aと約2000円/10a削減するとともに、株間の風通しを良くし、病害リスクを低減させている。</p>

令和2年度「飼料用米多収日本一」受賞者の取組概要

褒賞名	協同組合日本飼料工業会企画振興委員長賞
受賞者名	磯部 進
所在地	石岡市
品種名及び作付面積	あきだわら 4.4ha
10a当たり収量	680kg
地域の平均単収からの増収	156kg
移植日	5月3日～5日
施肥(基肥)	5月3日～5日(移植同時) 軽量一発中晩生多収米(30-11-5)30kg/10a (窒素9kg/10a)
施肥(追肥)	7月25日 NK-C6 5～15kg/10a (窒素0.85～2.55kg/10a) (生育量に応じて一部ほ場のみ実施)
収穫日	9月30日～10月5日
取組内容	<p>○経営形態・経営面積・作付品種及び各面積 ・家族経営(本人+期間雇用数名)により、水稲11haの専作経営。地域の担い手として、水田作業の受託を行う等、経営規模の拡大に取り組んだ。</p> <p>○多収品種への取組状況(取り組んでいる期間や経緯等)・作付品種及び面積・品種選択の理由等 ・平成30年から耐倒伏性に優れる知事特認品種「あきだわら」を導入した。</p> <p>○多収を達成するために取り組んだことについて (播種形式・施肥方法・水管理等、生産性向上に向けた取組) ・収量を確保するため、移植を5月3日～5日に実施した。 ・生育状況を確認し、追肥するなど、基本技術に取り組んだ。 ・カメムシ類による減収害を軽減するために、ドローンを活用して穂揃期に1回防除を行った。 ・隔年でケイカル30kg/10a、もみ殻ケイフン堆肥を800kg/10a施用するなど土づくりを行った。</p> <p>○生産コスト削減等の取組効果について ・畜産農家から購入した鶏糞と自家経営の副産物のもみ殻を原料に、もみ殻鶏糞堆肥を自作し、土づくりを行った。 ・フレコン出荷にすることで、網選別や袋詰めを省略し、出荷調製作業を省力・軽労化した。 ・できるだけ近い地域に農地を集約した。</p>